陳舜臣さんと
神戸を歩こう

Ｐａｒｔ　６

陳舜臣さんを語る会

もっと知ろう１　陳舜臣さんにとっての"祖国"とは 1

1.神戸大水害を目のあたりに黄河を連想、「まだ見ぬあこがれの祖国の山河」

【1938年、神戸大水害を目のあたりにして】
陳舜臣さんは『青雲の軸』で、1938年7月の神戸大水害を目のあたりにした主人公俊仁、及びその心の動きを次のように描いています。

俊仁はあたりを見まわした。彼はこのとき、目の前の濁流から、ふと黄河や揚子江を連想した。（こんな色だろうか？）まだ見ぬあこがれの祖国の山河。（集英社文庫版 p.104）

【1972年、初めての中国訪問】
陳舜臣さんは1972年10月、日本赤十字社が発行する証明書による「探親」という形で初めて中国を訪問します。陳さんにとっての「探親」とは、53年、祖国建設の情熱に燃えて中国に渡り、当時、北京放送勤務だった妹の妙玲さんに会うことでした。この時のことを記した朝日新聞（72.11.16、17）の記事を見てみましょう。

さて、このたびの旅行だが、北京の故宮、八達嶺の長城、西安郊外の華清池など、みな写真でなじみの風景だし、そこを舞台に活躍した史上の人物とも、浅からぬつき合いがあると、自分ではおもっている。だから、そのような場所に、私は完全に予想外のものはなに一つ発見しなかったといえる。はじめて見る土地なのに、「再会」というかんじのほうがつよかった。感慨がなかったのではない。いたるところで、私は深い感動を受けたが、それは久しく別れていたものに再びまみえるよろこび、と表現すべき性質のものだった。長沙から北京へむかう機上…。数千メートルの高度から、人間の営みを見おろす。この土地では太古から、わが祖先が生きる営みにいそしんできたとおもうと、胸が詰まりそうになる。まるでセンチメンタル・ジャーニーであった。

2.陳さんは三蔵法師と祖先が同じ ルーツは中原、潁川（えいせん）のほとり

1．陳舜臣さんの原籍は台湾の台北です。日本へ来るまでの陳家は、台北郊外の新荘鎮付近で農業を営んでいたが、中国の古典に親しむ主をもつ家系でもありました。

2．我が家は全部日本に居を移していて、台湾にいるのは父の従兄弟が最も近い親戚である。その親戚の住んでいるのは、台北に近い新荘というまちのはずれだった。今はもう台北と新荘はくっついてしまったが、そのころは田園風景でへだてられていた。（『道半ば』p.11）

3．小学三年の春休みの帰省は祖父の法事のためだった。…。長い「のりと」のようなものが読みあげられる。…。最後にのりと（？）を捧げられる人、つまり祖父の住所氏名が読みあげられる。これはわかった。住所は台湾ではなく、そこへ移住する前のものである。――泉州府同安県…。この泉州府が出てくれば、もうすこしで終わるとわかってほっとしたものだった。（『道半ば』p.48、49）

4．『陳舜臣中国ライブラリー㉕』「天竺への道」の一部分、三蔵法師玄奘に絡め、陳舜臣さんが陳家のルーツにふれた箇所を要約すると次のようになります。
玄奘の俗姓は陳と言い、現在の河南省開封（かいほう）市に近い潁川の人で、後漢の陳寔の子孫であるとし、続いて陳家のルーツについて次のように語ります。
じつは私の家も、陳寔（ちんしょく）を祖とすると称している。…。子供のころ、私はよく父や祖父から、ご先祖陳寔の話をきいた。ご先祖といっても、千七、八百年も前のこととときくと、まるで別世界の話のような気がした。（p.476、477）

5．1932年、祖父恭和死去。下はその後に作られた陳家の墓。

墓碑の文字、「陳家之墓」の上に「台北」、下に「潁川」の文字が刻まれています。墓碑裏面に恭和「三十一世祖」という文字を確認。従って、陳舜臣さんは、三十三世ということになります。

追谷墓地にある陳家のお墓

3.陳舜臣さんの 国籍変更

1. 1945年、終戦(日本の敗戦)　日本国籍から中華民国籍へ

あのとき、日本は連合軍の占領下におかれたでしょう。中華民国の代表団が来日しましてね。その代表団のところに私たちは国籍変更にともなう登録をするんです。そして中華民国の証明書みたいなものをもらったんですよ。

（『陳舜臣中国ライブラリー⑨』「自作の周辺」）

2. 進路変更

否応なく国籍を変更されたので、これまで自分に予定されていたコースが取りにくくなったのである。大阪外語は国立だから、そこの教授、助教授は国家公務員という一面がある。「任官」しなければならないのだ。（『道半ば』p.146）

3. 1970年、中華民国のパスポート取得

私が最初にパスポートを取ったのは中華民国のです。アメリカ、カナダを旅行したとき、まだ両国とも中華人民共和国を承認していませんでしたからね。ところが、最初のうちは、中華民国の領事館がなかなか出さなかったんですよ、私にパスポートを…。それは、私の親父が大陸と貿易をしているからだったんです。

（上掲「自作の周辺」）

4. 1972年10月、初めての中国訪問

陳舜臣さんは、日中の国交が回復すると、日本赤十字社が発行する証明書による探親訪問という形で、お母さん、弟介臣さんらと、当時、北京放送勤務だった妹妙玲さんを訪ねます。妙玲さんは53年、「祖国建設の情熱に燃え」とはいえ、まだ、二十歳になったばかりの若さで家族と離れ、第一回華僑帰国船興安丸で大陸に渡りました。

5. 1973年、中華人民共和国籍取得

8～9月 蘭州、酒泉、ウルムチ、トルファンなど憧れの土地を初めて歩く。この旅を機に、中華人民共和国籍取得。前年の探親訪問が伏線になっていることは確かです。

6. 1990年10月、日本国籍取得　－1989年の天安門事件をきっかけに－

おそらくあれ（天安門事件）がなければ、そのまま人民共和国の国籍でいったかもしれないですね。

ちょっと失望したんですよ。あのとき、私は新聞なんかに中国政府を批難する、かなりきつい文章を出しました。今後、入国拒否されるんじゃないかと、自分でも思ったほどです。

（上掲「自作の周辺」）

7. 1990年12月、台湾旅行。李登輝総統訪問

（1949年10月、日本に戻って以来）私は四十年のあいだ台湾に帰ることはなかった。台湾では白色テロのすさまじい時代で、何既明（かきめい）氏はときどき来日したが、私の帰郷には賛成しなかった。まだ危ないというのである。　私はその後作家となり、中国大陸へしばしば旅行し、また父の店も中国貿易をおこなっていたので、台湾へのビザははじめから出るはずはなかった。

蒋経国総統が戒厳令を解除（1987年）し、その翌年、蒋経国氏死去によって李登輝氏が総統となった。こんなふうに環境がととのい、1990年に私はやっと台湾の土を四十年ぶりに踏むことができた。私の帰郷にあたっては、何既明氏が舞台裏でいろいろと世話してくれたが、それには李登輝氏の支持があったのはいうまでもない。　（『道半ば』p.330、331）

■〈二重国籍状態〉

一方、陳舜臣さんは戦後、ずっと、中華民国籍も有していたと思われます。

妙玲さん
（坐っている左）

左の画像は本田善彦著『日・中・台 視えざる絆』（2006 日本経済新聞社）p.219より転載

4.陳舜臣さんはチャンドラ・ボースに負い目!?『虹の舞台』(頁は徳間文庫版による)

「国籍を変える」大変だが便宜的なことも

――国籍を変えるというのは、心情としても大変なことじゃないのですか。

陳　それはそうです。しかし一方で、便宜的なこともあり得ますしね。…。昔は、国籍を変えるときに批難するやつが、たくさんおったんですよ。あいつは祖国を売ったとかね。

（『陳舜臣中国ライブラリー⑨』「自作の周辺」）

『虹の舞台』プロローグ

神戸三宮に作られる「世界の味センター」にインド料理の出店を決めた宝石商マニラル・ライが殺された。彼には、インド独立の闘士チャンドラ・ボースから運動資金の宝石を奪ったとの噂があった。素人探偵陶展文の活躍は…。

■**チャンドラ・ボースの最期**　彼は太平洋戦争中、日本軍に協力してイギリスと戦おうとした。しかし、日本軍とともに敗れ、ソ連亡命を図る。途上、台北で、45年8月18日、彼の乗った日本陸軍機が離陸に失敗、その時の傷がもとで死亡した。

陳さんは、チャンドラ・ボースに負い目!?

陶展文は目をとじた。かつてしいたげられた国の人間として生れた彼は、独立のために戦ったボースの姿に感動したのである。

慚愧（ざんき）の念もあった。ボースは戦ったのに、自分は戦いから逃げたのではないか？陶展文が目をひらくと、大泉邸の椿の花が（紅い花もあれば、白い花もあるのよ）と、囁きかけるような気がした。（p.101、102）

ボースの墓
（杉並区 蓮光寺）

5.陳舜臣さんの、台湾を舞台にした小説は極端に少ない

陳舜臣さんの小説で台湾を舞台にした長編というと、『怒りの菩薩』しか思い浮かびません。短編では『胡蝶の陣』「シンカンの若者」、『三本松伝説』「祖師廟にて」、『紅蓮亭の狂女』「鉛色の顔」、『望洋の碑』「望洋の碑」と『推理ストーリー』「潜伏者」の五作あります。膨大な陳舜臣作品群からすると極端に少ないです。

■『怒りの菩薩』プロローグ

終戦直後、日本の植民地支配から解放されたばかりの台北の町で一つの殺人事件が起こります。

それから半年後、一九四六年春、主人公楊輝銘が日本から新妻林彩琴を伴って台湾へ帰って来ます。楊輝銘と林彩琴が彩琴の実家を訪れると、その前夜、第二の殺人事件が起こっていました。

そして、実家訪問中に、大陸へ行き既に亡くなったと思われていた林家の長男林景維が戻ってきます。ところが翌日、林景維は近くの菩薩山で死体となって発見されます。

あと、林景維殺人事件の背景と犯人捜しを中心にストーリーは展開します。

集英社文庫表紙

■観音村出身の留学生からの詰問状

（『怒りの菩薩』は）故郷の台湾を舞台にした。菩薩村は実在の観音村がモデルである。観音村出身の留学生から『拝啓陳舜臣殿』という七十枚の詰問状を受取った。作者の政治意識を弾劾したものである。つらい。エンターテイメントの作品には台湾を使うまい、と、心に誓った。

（「自作を語る」『宝石』昭和38年9月号）

ところで、「作者の政治意識」とはなにを言うのでしょうか？当時は、

一九四七年　二・二八事件
一九四九年　戒厳令施行。

蒋介石は国共内戦で敗北し、首都南京を脱出、重慶、成都などを経て、12月、息子の経国とともに台湾着。

そのような時代でしたが…。

■垂水千恵氏は論文「台裔作家が描く台湾表象－陳舜臣・東山彰良を中心に」において、「中国」歴史小説家として大成していく軌跡の中にも、台湾は常に陳舜臣の「根」として存在していたとし、その例として、『残糸の曲』をあげ、台湾独立運動にまつわる記述に言及しています。

6.陳舜臣さんの人生に影響を与えた三つのこと　ほか

陳舜臣さんの人生に影響を与えた三つのこと

一つ目。陳舜臣さんは昭和19年、二十歳のとき東京へ行った。このときの東京行きで、忘れ難いことがあった。

神田の古本屋で、『斯諾・西行漫記』という中国語の本を買ったことである。じつはその『西行漫記』こそ、エドガー・スノー『中国の赤い星』(Red Star over China)の中国語訳だったのである。『西行漫記』を読んだとき、私は二十にすぎなかったが、興奮をおさえることができなかった。幾晩も睡れなかったことをおぼえている。（『陳舜臣さんを語る会通信』No.114）

二つ目は、戦後、台湾への帰郷中に台北で起こった二・二八事件です。陳さんは台北に近い新荘で銃声を聞きますが、

「その音とともに、同胞の命が一つまた一つと消えて行くことを、そのとき実感できなかったことにたいして、私はいまでも罪悪感をもっている」（『道半ば』p.245）と述懐しています。

三つ目は、中華人民共和国支持の神戸華僑聯誼会の会長まで務めた父・陳通氏の背中だったのではないでしょうか。（『陳舜臣さんを語る会通信』No.130）

貿易會社「泰安公司」の経営に多忙であった父とそれをたすけた母
『道半ば』(2003 集英社) p.11

【陳舜臣さんの文筆活動の土俵及び祖国】

陳舜臣さんは、小学校入学前から、祖父から、『三字経』ほか漢籍の素読の手ほどきを受けた。成人し、史記、十八史、二十四史ほか歴史資料を精読した。また、三国志演義、水滸伝、西遊記、金瓶梅、紅楼夢など明清の小説を繰り返し読んだ。陳さんの中国ものでは、これらのほか、英文資料も使用され、30回を超える中国・アジア・ヨーロッパへの取材旅行で補強された。

一方、台湾は、17世紀に入り、大陸からの漢人系移民がやっと始まり、康熙帝の時代に清の版図に入るが、1871年の宮古島島民遭難事件の時でさえ、「化外の地」とされ、清の統治は十分に及んでいなかった。そんな状況下、台湾は、大陸と比べ、文字による記録・歴史が極端に少なく短い。

もちろん、植民地時代も戦後も台湾文学はあった。しかし、日本の統治下、及び戦後の二・二八事件、その後の戒厳令下において、文筆活動は命懸けであった。そのような政治状況下、上述のことと併せ、陳舜臣さんは、台湾文学の一翼を担うという道をえらばなかった。

しかし、前ページ、垂水千恵論文にあるように、「台湾は常に陳舜臣の"根"として存在していた」というのは、確かにそうだろう。

陳舜臣さんを語る会通信
NO.114　Apr.　2024

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2024年4月1日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

陳舜臣さんは毛沢東に心酔!?「詩人教師毛主席」

1976年9月9日、毛沢東（1893-）が亡くなった。毛沢東死去の情報に接し、陳舜臣さんは「歴史を見る毛主席」を『朝日ジャーナル』（9月24日号）に、「詩人教師毛主席」を『現代』（11月号）に、「巨星墜つ――毛主席のこと」を『小説現代』（11月号）に執筆しました。

ここでは「詩人教師毛主席」を取り上げます。失礼とは思いますが、このエッセーに出会い、陳舜臣さんの、文化大革命に対する反応の緩さが分かったような気がしました。（編集委員　橋雄三）

毛沢東の革命、政治、思想をつらぬいているのは詩

『現代』（一九七六年十一月号）「詩人教師毛主席」で、陳舜臣さんは、冒頭、次のように語っています。

後世の文学史家は、二十世紀の中国の代表的な文学者として、毛沢東、魯迅の二つの名をあげだろう。…革命家であり、思想家であり、戦略家であり、政治家であり、そして教育家であった。――毛主席にはずいぶん肩書が多い。多くの肩書をかれは煩わしく思ったようで、ある人にむかって、「私の肩書は一つだけ、教師というのがのこるだろう」という意味のことを語っている。どうやら、毛主席は自分の本質を「教師」と考えたようだ。…。

だが、私は毛主席のさまざまな事業――革命、政治、思想をつらぬいているのは詩であるという気がしてならない。すぐれた革命を指導できたのも、人民たちのためのすぐれた教師となれたのも、毛主席のなかに「詩」があったからではあるまいか。たましいのほとばしりが、思想や事業につながり、そこで高らかに鳴っているのだ。

忘れ難い『斯諾・西行漫記』

陳舜臣さんは、昭和19年の秋、東京へ行った。

このときの東京行きで、私にとって忘れ難いことが三つあった。第一は本郷の旅館で倉石武四郎先生から、中国の文字改革の話をうかがったことであり、第二ははじめてB29を見たことである。…。

第三に――最も忘れ難いのは、神田の古本屋で、『斯諾・西行漫記』という中国語の本を買ったことである。…。

じつはその『西行漫記』こそ、『中国の赤い星』(Red Star over China)の中国語訳だったのである。…。『西行漫記』を読んだとき、私は二十にすぎなかったが、興奮をおさえることができなかった。幾晩も睡れなかったことをおぼえている。…。

――この人がいて、この党を率いるかぎり、中国は滅びない。

そう信じることができたことによって、どれほど人びとが勝まされたことか。百年の屈辱をなめ、亡国の淵に立たされたことのない日本人には、救いの星を仰ぐ中国人の心理は理解しがたいであろう。

石川禎浩『赤い星は如何にして昇ったか』（臨川書店）より

陳舜臣さんが、神田の古本屋で買ったのは右のような本だったと思える。

一九七二年、毛沢東生家訪問

エッセーの記述に戻ります。

私は一九七二年に、毛主席の生家を訪ね、一九七四年には延安を訪ねた。その土地に立って、革命というものがなにであるか、肩で知ったような気がした。

一九七二年といえば、陳さんが、日本赤十字社の証明書による探親訪問という形で初めて中国を訪問した時だ。このとき、毛沢東の生家を訪問していたとは知らなかった。

私（橋）は一九九三年の年末、友人・王さんと、毛沢東の生誕百年に合わせて生家を訪れた。このときの様子を次頁と次々頁で報告します。

詩人教師毛主席
橋　雄三

もっと知ろう2　アジア、中国ものに見える"コスモポリタニズム"　1　『中国傑物伝』

『中国傑物伝』には16人の「傑物」が取り上げられています。どのような基準で選ばれているのでしょうか。陳舜臣さんは、文庫本の「あとがき」で、「好みに従ったと答えるほかない」とおっしゃっていますが…。陳舜臣さんの「好み」とは何なのか？それを考えてみたいと思います。

陳舜臣さんは、第七話の苻堅を「氐（てい）族の自己中心的な民族主義を厳しく戒めた理想主義者」として描き、また、耶律楚材を「私たちに民族・宗教・文化の違いを超え未来への進路を指し示してくれるきらめく星」と表現しています。中公文庫版→

	人物名	時 代	略　記
第一話	范蠡 はんれい	春秋時代	越王句践の功臣。のち野に下り巨万の富を得る。陶朱公
第二話	子貢 しこう	春秋時代	孔門十哲の一。衛の人。孔子より 31 歳若いという
第三話	呂不韋 りょふい	～前 235	秦の丞相。始皇帝の父ともいう
第四話	張良 ちょうりょう	～前 168	劉邦の謀臣、前漢創始の功臣
第五話	漢の宣帝 せんてい	前 91～前 49	前漢第9代皇帝。前漢賢帝の一人に数えられる
第六話	曹操 そうそう	155～220	三国魏の始祖、字は孟徳。その子、丕が魏を建国
第七話	苻堅 ふけん	338～385	五胡十六国の一、前秦第3代皇帝。華北を平定
第八話	張説 ちょうえつ	667～730	則天武后の人材登用策が道を開いた。3度宰相に就く
第九話	馮道 ふうどう	882～954	五代十国の5朝 11 帝に宰相として仕えた
第十話	王安石 おうあんせき	1021～1086	北宋、神宗の信任を得て宰相となり新法を実施
第十一話	耶律楚材 やりつそざい	1190～1244	モンゴル帝国の政治家。遼の王族出身
第十二話	劉基 りゅうき	1311～1375	元末明初。明建国、元勲の一人
第十三話	鄭和 ていわ	1371～1434 頃	明、永楽朝期、大船隊を率い南洋・インド方面に遠征
第十四話	順治帝 じゅんちてい	1638～1661	清朝第 3 代皇帝。都を北京に遷した
第十五話	左宗棠 さそうとう	1812～1885	曾国藩の下で太平天国を平定。のち、洋務運動を推進
第十六話	黄興 こうこう	1874～1916	孫文らと中国同盟会を結成。辛亥革命を推進

中公文庫版『中国傑物伝』井波律子「解説」

抜粋引用　傍線は加筆

この作品において、十六人の生の軌跡は、あくまで歴史資料にもとづいて追求され、想像力の介入による虚構への傾斜は、ストイックにせきとめられている。もう一歩、筆をすすめれば、小説が誕生する寸前で、踏みとどまろうとする抑制が、この作品に張りつめた快い緊張感をもたらしているといえよう。しかし逆にいえば、それは、小説家陳舜臣氏が抑制を解きはなち、大いなる創作の地平に踏み出そうとするとき、『中国傑物伝』の十六人の傑物はいずれも、その壮大な小説世界の主人公になりうる存在だということでもある。

おそろしくゴージャスなこの十六人の顔ぶれの選び方には、陳舜臣氏の志向や好みがくっきりとあらわれており、まことに興味深い。

コスモポリタニズムと儒教的ヒューマニズムの結合

十六人のほとんどに共通する要素としてあげられるのは彼らが透徹した現実主義者であることだ。理想をもった現実主義者であることが、本書に描かれる傑物たちの多くに共通する要素だ…。

陳舜臣氏が愛する傑物たちの核となる「理想」は、…、偏狭なナショナリズムを打破して民族にとらわれることなく、生きとし生ける者すべてに、幸いをもたらす社会を作りだそうとすることである。この明快このうえない強靭なヒューマニズムが、本書『中国傑物伝』に終始一貫して鳴り響く主調音となっている。ここに、日本に住む中国人作家としての陳舜臣氏自身の血肉と化したコスモポリタニズムと、もっとも上質の儒教的ヒューマニズムの美しい結合をみることもできよう。

耶律楚材(やりつ そざい)は、来るべきボーダレス時代の先駆者！

《1．人物　》

陳舜臣さんは、飯田利行著『大モンゴル禅人宰相耶律楚材』跋文で次のように書いています。

「耶律楚材はふしぎな魅力をもつ人で、彼の息吹きはいまもこの世界にこだましているような気がする。契丹王朝の末裔でありながら、女真王朝の金に重臣として仕えた家に生まれ、自分はチンギス・ハンに降ってモンゴルの宰相となり、グローバルな活動をした」「耶律楚材は、来るべきボーダーレス時代の先駆者といってよい」「人類の生き方を示すみちしるべ」

■モンゴル帝国の政治家。遼の王族の出身。初め金に仕えたが、1215年ジンギス汗に降り、その西域遠征に従軍。オゴタイ汗の即位に功あり。学問にすぐれ、天文・地理・医学にも通じた。1190－1244。（広辞苑）

《2．時代背景　》

唐が滅びたあと、半世紀ほどの混乱の時代を経て、宋が中原を統一したが、北方、契丹族の遼、続いて、女真族の金の力は強く、耶律楚材が生まれた12世紀末は、淮河以北は金の版図となり、宋は臨安(杭州)に遷都、南宋の時代となっていた。（右上の地図）

北方の草原ではチンギス・ハンによる諸部族の統一が進み、1215年、モンゴル軍は燕京(北京)を陥す。楚材という名には、父・耶律履の**「草原に生まれた巨大な力が金国をのみこんだとき、その力に用いられる人物になれ」**(集英社文庫『耶律楚材 上』p.22)という願いが込められていた。やがて、チンギス･ハンに召され（招くように工作し）、カラコルムに赴き、チンギス・ハンに仕える。

民族や文化の違いを乗り越えて、人々は相互に理解し、共存してゆかねばならぬという「作者の願望の体現者」として耶律楚材は描かれる。

《3．陳舜臣『耶律楚材』に対する評、解説》

（1）『耶律楚材』(1997年 集英社文庫)稲畑耕一郎による「解説」

十三世紀に生きた耶律楚材が、果して本当にそのような人間であったのかどうかは、ここでは問題ではない。作者陳舜臣は、耶律楚材の真正なる「伝記」や「評伝」を書こうとしたのではない。ある明確な意図をもって、これを「小説」化したのである。作品中の耶律楚材や他の登場人物には、作者の仮託した思いも多いはずである。

（2）杉山正明『耶律楚材とその時代』（1996年 白帝社）「あとがき」

陳舜臣氏の『耶律楚材』は、楚材をあらんかぎり巨大化、聖人化した歴史ファンタジーであった。小説は、ここまで現実から離れて、虚空のなかに飛翔できるのか。（中略）ようするに、せいぜいが「華北サイズ」の人にすぎない耶律楚材を、「ユーラシア・サイズ」の「超人」に仕立て上げたいばかりに、無理を重ねざるをえず、「超歴史」の解釈を繰り返さざるをえなくなったのだろう。

（左の写真■耶律楚材祠前で　1993年5月
集英社『Who is 陳舜臣？』）

《1.陳舜臣さんの『桃源郷』は大理!?》

桃源境といえば、誰もが武陵（現在の湖南省常徳県）を連想するであろうが、私はその地を雲南にもとめた。武陵色を薄めるために、私は「境」を「郷」にあらため…。

（『桃源郷』「この作品を読むかたがたへ」）

《2.『桃源郷』あらすじ》

12世紀初めの中国。金によって遼（キタイ）は250年の歴史を閉じた。金に隷属することを潔しとしない耶律大石たちは西方に逃れ、西遼（カラ・キタイ）を立てた。大石はマニ教徒であったが、自身の信仰は心のうちにとどめ、信仰は強制すべきものではないと信じていた。理想の国家を築くべく陶羽(主人公)たちを西へ、ペルシャへと向かわせる。

陶羽たちは、ペルシャでは、アラムート山砦（さんさい）の長老ハサン・サッバーフや天文学者・詩人ウマル・ハイヤームの薫陶を受け、さらに、行動・修業をともにする同志から感化を受けながらイベリア半島まで遍歴する。

《3.主人公一行の旅は大理、そして敦煌へ》

唐代初期に中国に流伝したマニ教は、９世紀中葉の廃仏令では、最も過酷な弾圧を受け、その信者たちはひそかに雲南に逃れ込み住み着いた。雲南の地は更に、北宋末の方臘(ほうろう)の乱で排斥されたマニ教徒を受け容れた。

主人公一行が西方への旅から戻り、雲南の大理国を訪れたとき、そこでは、強い外圧もなく、宗教に寛容な段氏の下、仏教徒、イスラム教徒、マニ教徒が共存して暮らしていた。主人公一行の旅は、大理国を訪れたあとも、ベラサグン、敦煌…と続く。

敦煌に着いた陶羽たちは、瞎老(シャラオ　東方マニの領導者)の眩術の中で瞎老のサゼスチョンを受け、自分の進む道を見つける。

宗教に寛容な政権(例えば大理国の段氏のような統治者)のもとで、「まことの信仰」をもつ人たちが、俗界のわざを磨き、生き生きと生活している。そこが「桃源郷」なのだ。

《4.名前をすてた宗教こそ「まことの信仰」》

今は、心のよりどころを宗教だけに求める時代じゃないと思うんですよ。いわゆる、今までの宗教ということですけれども。

だから私は、宗教とか主義、思想という名前は全部消して、とにかく一つのものが、どこか心にあると。それだけでいいんじゃないかという、そういう世界がいつかは現出してくると思っているんです。

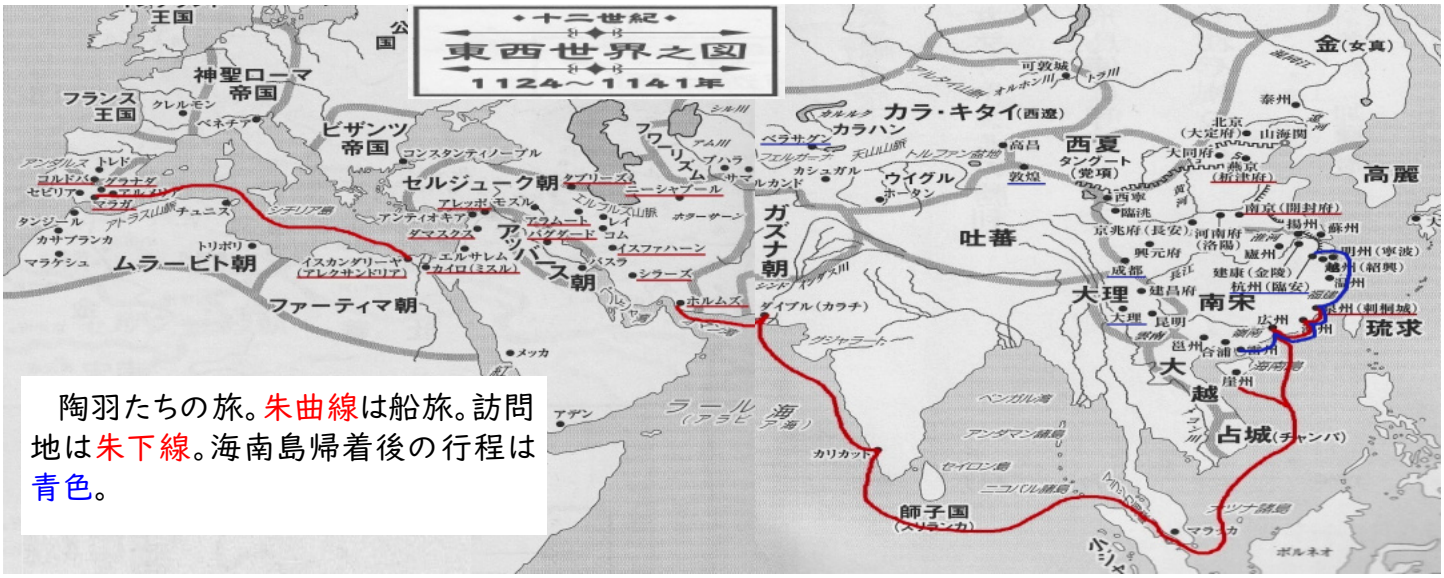
たとえば、それが、共産主義であってもそれでいいわけですよ。共産主義とかいう名前を消してね。とにかく、名前をつけるからいけないんですよ。なまじ名前をつけるから、戦争するんだという考えが私にはあるんです。

仏教だとか、キリスト教だとか、何々教だというものがそもそも世の乱れになるという思い。そういう乱れた世の時代に、それを悟った人がいて、さっき言いましたけれど、ただ真心、一つのものを心に持っている人たちが集まればいいんだと。そこがユートピアの世界なんですね。

この世の中の乱れは、何に因ってきたんだと。それは名前からきているということですよ。

（下線は加筆）

（『陳舜臣中国ライブラリー30』「自作の周辺」）



陶羽たちの旅。朱曲線は船旅。訪問地は朱下線。海南島帰着後の行程は青色。

陳舜臣略年譜　**水色字**は世界、中国（大陸・台湾）の出来事

西暦	年齢	事　項
1919		台北西村商店に勤務する父・陳通（1896-1971）、神戸本店に転勤 1933年、友人と泰安公司を創業
1924	0	2月18日、元町通7丁目で生まれる（七男三女の次男）
		11月28日、孫文、神戸で「大アジア主義」講演
		「小学校にあがる前に、私は二度か三度台湾に帰省したようである」
		小学校入学前後の頃、祖父から、兄篤臣(とくしん)の相伴で漢籍の素読の手ほどきを受ける。絵入りの『三国志演義』や『水滸伝』にも興味を持つようになる
1931	7	**9月 柳条湖事件**
1932	8	小学3年になる前の春休み、祖父の法事で台湾へ帰る
1936	12	4月 神戸市立第一神港商業学校入学
1937	13	**7月 盧溝橋事件** 中学2年の夏休み、父をのぞく一家で台湾の新荘へほぼ一か月の帰省
1938	14	7月 神戸大水害
1941	17	4月 大阪外国語学校印度語部入学　**12月 アジア太平洋戦争始まる**
1943	19	9月 同上、繰り上げ卒業。母校の研究所の助手になる
1944	20	秋、東京神田の古本屋でエドガー・スノーの『西行漫記』（「Red star over China」の中国語訳）を買う。興奮を覚え幾晩も睡れず
1945	21	3月17日 神戸空襲。『三色の家』のモデルとなった海岸通の家、焼失
		8月15日 第二次世界大戦終結
		敗戦で、日本国籍から中華民国籍となったことにより、母校で教職に就くという道が閉ざされる
1946	22	2月末、帰国船に乗る。台北県立新荘初級中学の英語教師を務める(～49.10)
1947	23	**二・二八事件起きる（台湾）**　■民衆による反国民党暴動を台湾省行政長官兼警備総司令陳儀が武力弾圧
1949	25	**10月 中華人民共和国建国**　10月 台湾から日本に戻る　■この頃になると、敗残兵姿(国民党軍)の大群が台湾へ(『道半ば』p.278)
		12月 国民党政府、台北に遷る
1950 ～ 1960	26 ～ 36	1950年3月 結婚。日中の民間貿易が再開され、忙しくなった家業を助けるようになる
		53年　妹・妙玲さん、祖国建設の情熱に燃え、二十歳になったばかりの若さで家族と離れ、第一回華僑帰国船興安丸で大陸へ
		57年頃から小説を書き始め、59年頃には、作家を職業とする決意が固まる
1961	37	**「枯草の根」 江戸川乱歩賞**　作家デビュー
1962	38	想像もしなかったほどの多くの原稿依頼に応じることとなる。受賞第一作となったのは**「三色の家」**（陶展文もの）
1965	41	小説以外では処女作、**「神戸というまち」**を書下ろす
1967	43	作家デビュー以来、推理小説一辺倒だった中で、突然、三千余枚の力作**「阿片戦争」**を書き下ろす。「（直木賞は）『阿片戦争』でもらいたかった」

1969	45	父・陳通、中華人民共和国を支持する神戸華僑聯誼会の会長に就任
		「青玉獅子香炉」 直木賞　※初出は『別冊文藝春秋』(1968年9月)
1970	46	5月のアメリカ及びカナダ旅行に際し、中華民国パスポート取得
		「玉嶺よふたたび」(初出 1967)**「孔雀の道」**(初出 1968)で**日本推理作家協会賞**
1971	47	**10月、中国の国連代表権交替(中華民国→中華人民共和国)** **「実録アヘン戦争」 毎日出版文化賞**
1972	48	**9月 日中国交正常化(日台断交)**
		10月 初めての中国旅行。日本赤十字社が発行する証明書による探親訪問という形で、当時、北京放送に勤務していた妹・妙玲さんを訪ねる。途上、湖南省湘潭市の毛沢東生家を訪問
1973	49	8~9月 蘭州、酒泉、ウルムチ、トルファンなど、憧れの土地を初めて歩く。この旅を機に、中華人民共和国籍取得。この後、堰を切ったように中国へ
1974	50	9月、3回目の中国旅行。延安にも。「その土地に立って、革命というものがなにであるか膚で知ったような気がした」
1976	52	**9月9日　毛沢東死去** ■陳舜臣さんの文章を掲載した紙誌 →「陳舜臣さん…通信」No.114、116
		「敦煌の旅」 大佛次郎賞
1981	57	「神戸というまち」の改訂版の趣、**「神戸ものがたり」**。1998年、2017年にも
1982	58	10月、韓国(ソウル、公州、光州、釜山)訪問
1987	63	**7月 台湾、38年にわたった戒厳令を解除**
1988	64	**1月 蒋経国総統死去。副総統李登輝が総統に**
1989	65	**6月4日、天安門事件** ■陳舜臣さんの文章を掲載した紙誌 →「陳舜臣さん…通信」No.109
1990	66	**3月、李登輝、選挙で総統に選出される**
		10月、日本国籍取得。12月、41年ぶりに台湾へ。李登輝総統訪問。以後、憑かれたように台湾へ
1992	68	**「諸葛孔明」**(初出 季刊「中央公論文芸特集」1985-90連載) **吉川英治文学賞**
1994	70	8月10日、宝塚歌劇80周年記念行事の講演中に舞台で倒れ（脳内出血）入院
1995	71	1月、5ヶ月の闘病を終え退院。4日後の17日、阪神・淡路大震災
2003	79	**「神戸わがふるさと」**（エッセイ17編、小説9編）　**「道半ば」**
2005	81	最後の小説**「曹操残夢 魏の曹一族」**
2008	84	二度目の脳内出血
		「天空の詩人 李白」自筆原稿としては絶筆
2010	86	神戸新聞に**「わが心の自叙伝」**連載(28回未完 2017年版「神戸ものがたり」に収録)
2011	87	5月、奥様(未知様)逝去。1990年、日本国籍取得時、蔡錦墩から陳未知に変更
2015	90	1月21日、市内の病院で逝去
		典拠・参考資料:集英社『陳舜臣中国ライブラリー30』年譜ほか

もっと知ろう４　Ｔ氏の書架に見る陳舜臣作品の全貌

推理小説、小説（一般）、エッセーほか　に三分類

Ｔ氏の書架にみる　陳舜臣作品の全貌

推理小説　単行本刊行年順

ほぼ

他人の鍵
幻の百花双瞳★
青玉獅子香炉★

孔雀の道

玉嶺よふたたび

紅蓮亭の狂女★
濁った航跡
影は崩れた
炎に絵を
桃源遙かなり★
白い泥
まだ終らない
黒いヒマラヤ
月をのせた海
天の上の天
割れる
怒りの菩薩
方壺園★
弓の部屋
三色の家
枯草の根

★は短編集

獅子は死なず★
神獣の爪★
三本松伝説★
海の微笑★
杭州菊花園★
異人館周辺★
崩れた直線★
クリコフの思い出★
神戸異人館事件帖
燃える水柱
漢古印縁起
闇の金魚
青春の烙印
柊の館

虹の舞台

失われた背景
長安日記
笑天の昇天★
南十字星を埋めろ★
望洋の碑★
六甲山心中★
崑崙の河★
夜の歯車★
異郷の檻のなか★
北京悠々館
凍った波紋
銘のない墓標★

Ｔ氏の書架にある陳舜臣作品を**推理小説**、**小説（一般）**、**エッセーほか** に三分類し、ここに掲載しました。

陳さんは「分類ぎらい」です。確かに、小説（一般）の欄にあげている「残糸の曲」「桃花流水」「相思青花」「夢ざめの坂」などはすべてミステリー仕立てです。しかし、分類することによって見えてくるものもあるかと思い、あえて分類してみました。

小説（一般）単行本刊行年順

小説十八史略（一）
鄭成功 上下
桃花流水 上下
新西遊記 上下
もの…水滸伝
秘本三国志 前後
青雲の軸
もの…唐代伝奇
もの…史記
続・中国任侠伝
風よ雲よ 上下
中国任侠伝
残糸の曲
阿片戦争 上中下

小説十八史略（二）～（六）及び傑作短篇集
諸葛孔明 上下
五台山清涼寺★
戦国海商伝 上下
中国畸人伝
相思青花
インド三国志
長安日記
曼陀羅の人
妖のある話（一）～（四）
太平天国
珊瑚の枕 上下
江は流れず 上中下
景徳鎮…贈り物
熱砂とまぼろし
胡蝶の陣★
小説マルコポーロ

「景徳鎮…贈り物」は「景徳鎮からの贈り物」の略
「もの…水滸伝」は「ものがたり水滸伝」の略
「もの…唐代伝奇」は「ものがたり唐代伝奇」の略
「もの…史記」は「ものがたり史記」の略
★は短編集

曹操残夢
中国美人伝
青山一髪 上下
桃源郷 上下
天球は翔ける 上下
山河在り 上中下
曹操 上下
チンギス・ハーンの一族 1～4
耶律楚材 上下
聊斎志異考
琉球の風
中国傑物伝
夢ざめの坂 上下

エッセーほか 単行本刊行年順

「楠木正成湊川…」は「楠木正成湊川の戦い」の略
「シルクロード旅…」は「シルクロード旅ノート」の略
「歴史の交差路」は「歴史の交差路にて」の略
「叛旗小説李自成上下」は陳謙臣との共訳
「対談中国を…」は「対談 中国を考える」の略

「天空の詩人」は「天空の詩人 李白」の略　「巷談英傑列伝」は「巷談 中国近代英傑列伝」の略
「対談集 未来…」は「対談集 歴史に未来を観る」の略

中国の歴史（一）～（七）及び中国の歴史近・現代篇（一）（二）

あとがきにかえて　安井三吉著『孫文 華僑 神戸』紹介

安井三吉著**『孫文 華僑 神戸』**(2024 神戸大学出版会)を紹介します。
先ず、同著 **はじめに** から抜粋引用します。

今年2024年の神戸は、神戸(日本)とアジア、さらには世界との関係を考えるきっかけとなるであろう二つの記念日を迎えています。
一つは、２月18日、すなわち神戸の生んだ著名な文学者陳舜臣さんの生誕百年の日です。陳さんは1924(大正13)年の２月18日、神戸で生まれ、2015年1月21日、90年の生涯を閉じました。彼はその多彩な作品だけでなく生涯を通じて私たちがアジアや世界を考えるうえでの沢山の糧を遺してくれました。
もう一つは、11月28日、近代中国の革命家孫文が、神戸で有名な「大アジア主義」の講演を行なってから百年の日です。孫文は1924年11月28日、兵庫県立神戸高等女学校で、二千とも三千とも言われる市民に向けて「大アジア主義」の講演を行いました。

同著は序章と三つの章からなりますが、その章題は次のとおりです。
序章　誰も気づかなかった孫文最初の来神ー1895年11月
第一章　孫文を迎えた人々
第二章　孫文を語りついできた人々
第三章　「大同の夢」を求めてー陳舜臣の孫文像

一年間、孫文と同じ時代の空気を呼吸した陳舜臣

安井三吉先生が、上掲書第三章、**「大同の夢」を求めてー陳舜臣の孫文像、(一)孫文という大きな存在**、で言及されている陳舜臣、加藤徹両氏の対談の続きを『陳舜臣対談集 歴史に未来を観る』（二〇〇四 集英社）二四九頁から引用します。

加藤　陳先生は一九二四年のお生まれで、孫文は翌二五年に死去しています。先生と孫文は一年間、同じ時代の空気を呼吸したことになりますね。
陳　ええ。私の父親は一八九六年に生まれました。そして一家が神戸に移住した一九二四年二月に私が生まれました。この年、孫文が神戸に来て、県立高等女学校で講演をしてるんです。そのことに、私は何か見えない縁のようなものを感じています。

〝大同〟と〝コスモポリタニズム〟の重なり工合

ところで、上掲書第三章の章題、「大同の夢」を求めて、の〝大同〟と陳舜臣さんがおっしゃる〝コスモポリタニズム〟との重なり工合はどうなのでしょうか？ どこがどの程度重なるのでしょうか。全く重ならない、ということはないと思うのですが…。

『山河在り』に記述のある神戸

上掲書第三章で言及されている小説に、**『山河在り』**があります。
『山河在り(中)』「秋の送別」の章では、「大アジア主義」講演の兵庫県立神戸高等女学校が、また、「五千円始末」の章では、中華会館や関帝廟が記述されます。

上掲書表紙 ↓